

嘉念坊善俊墓石

13 世紀に白川に浄土真宗を伝えたと言われる嘉念坊善俊の終焉の地は、ひととき質素である。墓には小さな石が積まれ、雄大な杉の木の足元には簡素な石板が置かれている。浄土真宗の教えを反映したこの謙虚な形は、数十年前まで白川で一般的なお墓の形だった。

祖先崇拜、つまり死者を供養するための墓を整備することは、日本では遠い古代から宗教生活の中心をなしていた。一方、浄土真宗の開祖である親鸞(1173-1263)は、先祖を祀り、やがてあの世に行けるように遺骨のある墓で儀式をすることは不要であると説いた。阿弥陀仏は死後すぐに救いを与えてくれるのだから、墓や骨壺は必要ないという教えだ。

白川では親鸞の教えが広く浸透し、死者は屋外で火葬され、ほとんどの遺骨は自然に散布されていた。善俊の墓のように、わずかな骨片を埋め、その上に石を積むことが一般的だった。